



感動した 映画「劔岳 点の記」の試写会①

木村大作監督 ★いよいよ本年6月20日 全国ロードショー★

映画「劔岳 点の記」応援企画

■測量界を代表して感謝の辞を述べる

新田次郎原作、木村大作監督の「劔岳 点の記」の試写会を見た。開会の挨拶に立った木村監督は、短い挨拶をしたが、言葉に詰まって感極まっておられた。しばし気持ちを落ち着かせてから「感動しています」と言われた。私も実は同じく感動した。測量を知っている者として、実際に劔岳に登頂した者として、「厳しく」、「生真面目で」、「高邁な」3K測量技術者、柴崎芳太郎と山案内の長治郎の姿を見て涙した。

小説を読み、映画のことを考えたとき、どのようにして結末を作るか監督の手腕に興味を持っていた。映画では、測量隊が登頂をした後、劔御前から劔岳頂上を視準するトランシットの望遠鏡の中

の、山岳会の小島烏水らと互いの健闘を讃えるのがラストシーンだった。初登頂でなかった事に対する陸軍の冷たい処遇に、木村監督は「男の友情」と「俠気」で答えた。

柴崎測量官の若妻役の宮崎あおいが、どのくらい出てくるか興味を持ったが、想像以上に出てきて、映画の彩りに貢献していた。昔の女性の格好はしているが、表情と仕草は今風の若妻のそれで「色気」があった。これもこの映画の楽しみであろう。

立山連峰を中心にした自然の情景がすばらしかった。山の好きな者には答えられないシーンの連続だった。立山連峰から見える富士山のシーンは、撮影に相当

苦勞したに違いない。紅葉あり、吹雪あり、雪崩あり、高山花あり、雷鳥あり、かも鹿から熊まであり、自然の織りなす美は心が洗われる感じだった。

測量に従事している者には必見の映画である。是非子供と一緒に映画を鑑賞したら良い。無言のうちに、親子の気持ちが結ばれると思う。「オヤジの背中」という意味が分かるに違いない。

日本測量協会および日本の測量界を代表して、木村監督、俳優の皆さん、そしてスポンサーの東映に、測量に関する映画を製作してくれたことに衷心から感謝の意を述べたい。

(社)日本測量協会 会長 村井 俊治

■「木村大作」と聞くと私が思い出すのは「八甲田山」だ

30余年前私が学生だった時に驚かされた映画である。

まだCGも無い時に、一寸先も見えない大吹雪の八甲田山で撮影を担当したが、誰だろう、今回「劔岳 点の記」を撮った木村監督である。本物の映像を撮る為に何日でも待ち、決して妥協をしない

「黒沢組」の監督である。

その違いはエンディング一つみても分かる。私が今まで見た映画ではほとんどのエンディングのバックは黒で白い字幕が下から上がってくる。または撮影で使用した写真が貼られているだけでした。ところが、この映画では画面一杯に満開と咲

く草花や色鮮やかな紅葉の景色、頂上から望む夕陽、静寂に包まれる銀世界の劔岳をただエンディングの為に惜し気もなく使っている。この満開に咲く草花は一年365日の内、わずか数日しか取れない映像であろう。

日刊建設工業新聞社 横山 雅史

■「楽しんで金儲け」へのアンチ・テーゼだ

主人公、柴崎芳太郎が何のために地図を作るのかと自問自答する中で、正確にその台詞を憶えているわけではないが、「人間は自分の居場所のことを知りたいのではないだろうか。人々にその人達がいる場所、住む土地について知るための材料を用意するのが地図を作ることだ」という趣旨のことを言っている。これはまさにその通りだと思った。地図もデジタル化が進み、経済的な機能が重要視さ

れるようになっていく。それはそれでよいのだが、やはり地図の原点は、土地の姿を知ると言うことであろう。道案内だけではないはずである。柴崎芳太郎の苦闘によりそのことを改めて確認することができた。地図の空白を埋めるとは、国土を知ると言うことに他ならない。

何事も一歩一歩進めていかなければ成し遂げられないと言うことを測量・地図の世界から発信できたことが我々測量・

地図人にとっては最大の喜びではないだろうか。「楽しんで金儲け」の行き着いた結果がこのたびの金融恐慌であったとしたら、そのアンチ・テーゼを測量・地図の仕事をもって映画という手段で示されたことの意味は大きい。

(社)日本測量協会副会長・(社)地図協会理事長

星埜 由尚

■息をのむ臨場感

素晴らしい映画を見せていただき、ありがとうございます。久々の感動でした。実写の迫力！終始大画面の迫りに圧倒されっぱなし……映画ならではの作品ですね。大自然の美しさに圧倒されっぱなしでしたが、その中にも、新婚夫婦の清らかな色香、男たちの寡黙な友情、親子の絆……人間ドラマもしっかり描かれ

ていました。

雪崩、雪渓での滑落、岩場での転落、豪雨、吹雪……見事なカメラワーク……その臨場感に、ただただ息をのむばかり。

登場する動物たちは、長い撮影期間に出会った仲間たちでしょうね。カモシカは何とも良い表情で登場していました。

音楽も親しみある曲が多く、その分りラックスして鑑賞することができたような気がします。

完成度が高いこの映画は、アカデミー賞外国語映画部門も夢じゃありません！

画家 木部 一樹

■私の測量風景

試写会の招待状をいただいて、映画「劔岳 点の記」を見た。そこには、地図を作るための測量をする測量手、そして測手と呼ばれる測量助手、さらに彼らを支える山岳案内人などがいるだけだ。新田次郎の同名の小説を映画化したのだから、そこには山岳会との多少の関わりも、陸地測量部上官との軋轢もある物語なのだが、本当のところは、コピーにもあるように、名誉のためでも、利のためでもなく、ひたすら仕事に励む測量手がいるだけなのだ。

帰りがけに立ち寄った出版社の某氏からは、「劔岳 登山後主人公の柴崎は、後日どのような評価を得たのですか？」と質問された。「何もなかったと思いますよ。大きな事故もなく、ただ、一つの仕事を終えただけのことでですから」と私は答えておいた。地図を作る、測量をする

ということに意義はあっても、個人の利得などないのだ。

そして映画の中での話、「何のために地図を作るのだろうか」と自問する主人公柴崎芳太郎に、先輩古田盛作は言う、「……地図とは、国家のためでなく、そこに生きている人のために必要とされているのではないのでしょうか」

と。「嗚呼、私たちは、そこに生きている人のために地図を作ってきたのだろうか？ 作っているのだろうか？」私も自問する。私が、柴崎芳太郎と測量、そして地図のことについて書いたものを少々紹介します。

「三五會報」などにみる陸地測量師の片鱗1
—柴崎芳太郎の素顔—

「三五會報」などにみる陸地測量師の片鱗2 —素顔の陸地測量師たち—

「劔岳 登山は柴崎芳太郎に何を与えたか」「私の大切にしてきた一枚の地図」

オフィス地図豆サイト

<http://www5a.biglobe.ne.jp/kaempfer/>

オフィス地図豆 山岡 光治



■ シンプルな展開だから、映画を堪能できた

山に関わる仕事をしており、現場で仕事をしていた頃に三角点を見かけることがありました。三角点として設置された重そうな標石を見る度に、こんな所まで運んで設置されたその困難さを自分自身のこととして想像したりし

たものでした。この映画ではその作業が前人未踏の劔岳で行われた、そんな設定に映画を観る前から想像力をかきたてられました。ストーリーは困難な状況に対して決意を固めてやり遂げるというすごくシンプルな展開でしたが、

見ごたえのある素晴らしい映画でした。

劔岳という雄大な自然を相手にしているからこそ、シンプルな展開が相応しいと思いました。

林野庁 林政課 広報第一係 中川 明洋

■ 山のプロを自任する私もジーンときた

たったいま、「劔岳点の記」見て参りました。このたびは試写会のハガキをお送りいただきありがとうございます。

私は、表現活動に関わっているつもりなので、人間の表現に関しては厳しい視点を持っているつもりです。

友人からも辛口過ぎるとよくいわれます。登山に関する映像表現は、おおむね、とんでもないウソが混じることが多く、このたびの「点の記」も登山を知らない人が楽しむようにつくったものだと失礼ながら、見る前は予想しておりました。

だが、なんといっているのでしょうか、正直に申し上げてこの作品はとても面白かったです。失礼ながら驚きました。

おそらく、それぞれのシーンのあいだを自分の記憶が埋めるのでしょう。勝手に登場人物やそのまわりの方々の気持ちを想像して、特に、感動する場面ではないのにジーンと来たり。

登山の映像を見るときは、どうやって撮っているのかを考えながら見る人が多いですが、「点の記」は引き込まれて、その映像世界に入り込んで見ることができました。

細かいことを言い始めれば、「それじゃ雪目になるでしょう」とか「もっと帽子が汚れるでしょう」「その荷物では足りないでしょう?」とか、いろいろあります。

ただ、この映画をみて、これまで四季

を通じて登ってきた劔岳が、さらに好きになりました。

僭越ながら、私には劔東面の冬期初登攀の経験があります。

おそらく、劔岳を巡る初登攀としては、一番新しいものだと思います。

2002年の3月のことです（既に日本に未踏のラインはほとんどありません）。

他にも夏の長期山行、山スキー、岩登りで劔岳とは登山者として長く接してきたつもりです。

その経験が「点の記」を多くの人に見てもらえるお役に立つなら、なんでもお手伝いしたいと思います。

『岳人』編集部 服部 文祥

■ 測量技術者としての魂を思い起こした

素晴らしい映画でした。

感動でしばらくは何も喋れませんでした。帰り際に、木村監督に挨拶をするのがやっとでした。

測量は、自然との闘いです。天候が良い時は癒しになり、美しい自然を堪能できます。天候不良の下では、特に山岳では自然は悪魔と化し測量官（測量技術者）を悩ませます。さらに測手などとの人間関係もギクシャクしてきて測量官は、この場をいかに切り抜けるか、仕事が完成できるか等々試練に立たされます。

また、測量現場は全て異なり、過去の経験を100%活かさない厳しさもあります。

厳しい試練を乗り越えて、信頼できる測量成果が完成させることは、測量官としては当たり前。

上記のように映画を見て、これまで眠っていた測量技術者魂を再認識したところ。若い人達には是非この映画を見て欲しいです。

今回は、測量官や測手の留守を守る柴崎夫人や宇治夫人とのコミュニケーションが取れて留守部隊のチームワークも現場測量班に負けずに万全でした。

この両女性が時折スクリーンに顔を出して、観客を安心させてくれました。あおいちゃんはさすがですね。

測量技術センター 大瀧 茂

〈次号へ続く〉

